平成２５年度研究開発実施報告書

第１章　総説

１－１　研究開発課題

東日本大震災の教訓や体験を基に，防災教育を中心とした安全教育を独立した領域として創設し，児童が生涯にわたって自助と共助の意識を持って行動していく防災対応力や，危険を予測し回避する力，安全な社会づくりに貢献する心等を育む教育課程の研究開発

１―２　研究の概要

震災以後，本校では独自に生活や総合的な学習の時間を中心とする震災復興学習に取り組んできた。しかし，震災を学校で体験した児童の割合は年々減少し，いずれ全員が卒業するとともに，数年後には震災の記憶そのものが薄い児童が入学してくる。震災の教訓や体験を風化させず，今後の教育活動の中で継承していくためには，児童の直接体験に拠らない，より汎用性・継続可能性のある防災教育の学習プログラムや具体的な指導法を確立していく必要がある。そのために，まず，教育活動全般を防災の観点から広く見直し，関連付けて，新たな視点で再構築するとともに，教科，領域の内容の一部を統合した新領域（仮称）「防災安全科」（以下，防災安全科）を全学年に創設する。

防災安全科においては，最終的に災害安全にとどまらず，交通安全や生活安全の内容も含めて，危険の察知や回避，他の人や社会の安全に貢献する資質・能力を育むこと等を目標とする総合的な安全教育に取り組む。

１―３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

教科・領域等に散在していた防災教育を中心とした安全教育に関連する内容を統合した防災安全科を創設し，新領域を通して身に付けさせたい資質・能力を明確にして，６年間の系統的・発展的な指導法を開発・実践していけば，児童の自助と共助の力を育み，安全で安心な社会づくりのために主体的に行動できる児童を育てることができるのではないか。

（２）教育課程の特例

①平成２５年度（第１年次）

今までの教育課程の中で防災教育を教科横断的に行う。

②平成２６～２７年度（第２，３年次）

防災安全科を創設し，新教育課程の中で学習指導を行う。防災安全科で扱う内容は，主に防災とする。全学年共に年間総時数を２０時間とする。週時程に防災安全科を位置付け，

隔週ごとに実施する。
③平成２８年度（第４年次）
防災安全科で扱う内容は，防災から安全まで広げていく。全学年共に年間総時数を３５時間とする。週時程に防災安全科を位置付け，週１時間程度実施する。

（３）研究成果の評価方法

○　児童に身に付けさせたい「知識」「技能」「態度」の観点や，指導内容と防災等の関連性における直接性・間接性の観点など，指導のねらいや特質に応じた評価項目や評価指標を設定し，教育効果を評価する。
○　防災や安全に関する意識や実態等に関して，児童，保護者，地域関係者，教職員等を対象として定期的に調査を実施し，取組の成果による変容の経年変化を評価する。

１－４　教育課程

（１）教育課程の特徴

東日本大震災や今後，起こりうる可能性の高い南海トラフ巨大地震等，防災と復興が社会の大きな課題となった現在，教育現場においても新たな防災教育の必要性が唱えられるようになった。震災の教訓や体験を風化させず，今後の教育活動の中で継承していくことが被災地にある本校の使命と捉え，持続可能な防災教育を目指した防災安全科を創設し，編成を行った。
①　震災の教訓や体験を生かした資質・能力の設定
第１年次である今年度は，防災安全科において育てたい力を明確にした。設定にあたっては，震災のときの子どもたちの様子を振り返ることから始め，そこから，どんな力を身に付けさせたいかを具体的な子どもの姿として出し合った。日常的な備えを家族とともに行う，指示でなく自分の判断で行動する，地域のコミュニティの大切さを実感しているなど，多くの意見が出された。それらを整理してまとめ，最終的に４つの資質・能力（自助として「危険を予測し判断する力」と「安全を確保する力」，共助として「人とつながる力」と「社会とともに歩む心」）を設定した。さらに，これらの資質・能力をもとにして，防災安全科の目標を明確化し，取り扱う学習内容と領域を整理していった。
②　新たな防災単元の開発
各教科・領域には防災に関連した内容が散在しており，それらを統合して学年ごとに新たな防災単元の設定を行った。単元の開発にあたっては，社会，理科，体育，家庭，生活，総合的な学習の時間，道徳，特別活動の８部会ごとに分かれて防災教育に資する内容を確認することから始めた。その後，学年ごとに，１つの内容を充実したり複数の内容を教科横断的に統合したりすることで，単元として構成していった。
〈例１〉生活での単元「まちのすてき」に学級活動や道徳を関連させて構成する。登下校中に災害に遭遇したときに，助けてくれる人（店）を確認させ，助けを呼ぶ方法を身に付けさせる。さらに，子どもたちの安全をふだんから見守ってくれる人たちに感謝の気持ちを表現させ，つながりを持たせる。

〈例２〉総合的な学習の時間「未来の七郷まちづくり」に，防災の視点やコミュニティの大切さを加えることにつながる単元として設定する。思いやりや協力等の道徳的価値を関連させ，防災にも役立つ「これからの社会におけるコミュニティづくり」を考えさせる。
〈例３〉扱うべき自然災害が多いので，４年生で地震と津波，５年生でそれ以外の自然災害等に分けて学習する。理科と社会の防災関連の内容をつなげ，それに備えや身を守る方法を加えて１単元とする。

このように，社会的な知識に技能面の内容を加える，生活の技能に道徳的な価値を加えるなど，従来にはない新しい防災単元として構成した。よって，防災安全科は，知識を伴う教科の側面と道徳や総合的な学習の時間の側面を持つような領域に編成されたといえる。

（２）教育課程の内容等

① 児童の発達段階から

震災のときの子どもたちの姿から資質・能力，領域，内容を設定していった。児童の発達段階から，自助においては，主体的に行動する姿を以下のように捉えた。

・下学年：「災害時に起こる危険について知り，大人の指示に従ったり助けを呼んだりするなど適切な行動ができるようにする。」
・上学年：「災害の特徴と危険を理解し，自ら安全な行動ができるようにする。」

共助においては，それを支える態度を下学年から養うように捉えた。

・下学年：「自他の生命を尊重し，他の人や地域の人と積極的にかかわろうとする。」
・上学年：「地域の一員として，他の人や地域の安全に役立とうとする。」

今後は，各学年部で目標及び領域ごとの内容を設定して，防災安全科学習指導要領としてまとめていく。

② 学年間の教育課程の一貫性・継続性

防災安全科で取り扱う内容を６つの領域に設定し，各学年または学年部においてすべての領域を網羅するように配慮した。開発した防災単元の内容においては，学年間で繰り返し取り上げている項目もあれば，あまり扱われない項目もある。どの学年で何を学習するか，発達段階から何度も扱う必要のあるものは何かなどについて，さらに整理していく。

③ 教科等の間の連携性，関連性

育てたい資質・能力につながる防災関連の内容を各教科等から移行して，防災単元として設定した。移行にあたっては，１つの教科・領域のみに限定せず，複数を組み合わせた。低学年では，主に生活と特別活動，中学年では，主に社会，総合的な学習の時間，特別活動，高学年では，主に社会，理科，道徳，特別活動，特別支援では，主に総合的な学習の時間，生活単元学習からの移行を行った。下学年は教科・領域の数が少ないため，開発した防災単元の数も下学年の方が少なくなった。よって，今後，上学年で作成した防災単元を下学年においても設定していく場合が想定される。尚，教科等からの移行により，その内容への影響が出ないように，教育課程全体を見通し検討していく。